

本書の主なねらいは、中世における地域社会と仏教を中心とした宗教との相互関係を分析し、地域社会の精神世界に通じる水脈を探ることにある。

中世社会の顕著な特徴は、生産の前提となる所有、人間が自然に働きかける労働、その結果としての分配と消費という広い意味での生産の全過程にあつて、宗教の占める位置が大きかったところにある。

そして中世仏教の核となった顕密仏教は、土着信仰と習合しつつ、地域社会へ徐々に定着するにいたつた。日常生活における年中行事や、自然現象、とりわけ災異の解釈と解決にあつて、大きな役割をはたしたのは呪術を基礎とする祈禱である。

祈禱は、夢窓疎石が「世俗の御公事にことならず」（『夢中間答』）と述べたように、権力と相互依存の関係をとりむすぶ有力寺社にとつては課役の意味をもつたが、地域社会においては、日々の安寧を保証するものであつた。そして、般若会などのもろもろの法会などからなる年中行事や儀礼への参加は、地域における身分秩序の確認という意味をもつ一方で、先祖への追善供養を営み、生きてあることをともに喜び、村人相互のつながりを強める役割をはたしたのである。鳩摩羅什訳の妙法蓮華経を典拠とする「現世安穩、後生善処」には、現世における利益と、死後にまで続く浄福への願いが込められており、この対句は写経などでしばしば用いられた。

地域社会の寺院と僧侶のあいだにあつては、江戸幕府権力による寺院と民衆の統制を企図した、本寺・末寺体

制や寺請制度などは様相のことなる、宗派や門流にとらわれないゆるやかで幅広い交流があり、宗教世界を豊かなものにした。

一六世紀から一七世紀の在地においては、生産力の高まりなどを土台として、有力者により開創・維持される寺院のみならず、有力な檀那をもたない、民衆による、のちの村落寺院にむすびつく堂舎の建立が続き、かれらの精神世界の基盤となったことに注目しなければならない。

一方、莊郷で暮らす諸階層の人々にとつて、鎮守は祭礼や護符の配布などを通じて、五穀豊穡・病氣平癒などの現世利益や、来世での救済などを祈願する場としての役割を強めていった。

本書は、こうした中世の政治や社会と宗教との連関についての認識を基礎とし、前者『日本中世の政治権力と仏教』（思文閣出版、二〇〇一年）にひき続いて、宗教の社会的機能を検討するものである。前者が天皇護持僧や祈禱所・比丘尼御所など政治権力と仏教との関係の解明を主眼としたのに対し、本書に収めた諸論文は、地域社会と仏教との関わりを考察するものが中心であり、写経や法会などにみられる個人や集団の宗教行為がいかなる社会性をもつか、に対する答えを得ようとする作業としての意味をももっている。本書は三篇一二章と余篇から構成されるが、各章の目的について簡潔に述べておきたい。

第一篇では、仏教の教義の拠りどころとなる經典のうち、大般若波羅蜜多經（以下、大般若經と略記）や五部大乘經の書写や摺写の実態、さらに大般若会や大乘会などの法会の執行について明らかにし、貴族社会や武家社会での展開、および地域社会への伝播の過程を検討する。

隨の天台智顛は数多くの大乘經典のなかから、華嚴經・大集經・摩訶般若經（大品般若經）・法華經・涅槃經の五部を選び、そのうち法華經を最上とした。五部大乘經という一括経はこの教説をもとに日本で成立したもので、一一世紀後半以降、貴族社会で流行し、一二世紀には、地方でも書写や摺写が行われるようになる。

五部大乘経は、後水尾天皇の皇子で、近世初期、妙法院門跡をつとめた堯如法親王が、『五部大乘経捷徑録』（元禄四年（一六九一）成立）に、「およそ仏門に入る者の、これを読み、その梗概を知らずばあるべからず」と記したように、仏道入門にあたっての要訣と位置づけられていた。第一章では従来、研究成果の乏しい五部大乘経の成立の背景と貴族社会における展開について、第二章・第三章では、地方への広まりの事例として、駿河と遠江に伝来した五部大乘経について検討する。

大乘経典のなかで最大の大般若経は、唐の玄奘が六六三年に訳したのち、四〇年を経ずしてわが国に輸入され、以後、国家安泰や五穀豊穰などの予祝祈願、天災異変の除災、追善・算賀、異国降伏の祈禱や、神前法楽を目的としたほか、村落では虫払や祈雨などの年中行事にも広く活用された。第四章は美濃における大般若経の開板事業の経過と、近世にいたる伝来と活用を明らかにすることにより、地域社会での大般若経の役割を考察したものである。補論1・2・3では、駿河・伊豆で書写された大般若経の成立過程と社会的背景を分析する。

地方における大般若経や五部大乘経の書写や摺写、さらに施入や法会の実態、修理の過程を詳細に分析すれば、莊郷や村をこえた寺院や僧侶のネットワークを考えることができるし、中世の地域社会と仏教との関係をより仔細に考察する材料としてきわめて重要な意義をもつ。

第二篇は、女性と鎌倉禅、六十六部聖、改竄された神社縁起などを手がかりとして、地域社会における寺社の役割を考察するものである。

第五章は、鎌倉禅の世界にもっとも深く親しんだ女性のひとり、得宗北条貞時の妻で高時の母覚海円成と鎌倉禅との関わりについて検討することを通じて、女性と禅宗とのむすびつきを明らかにするとともに、幕府滅亡後、円成が伊豆国北条の地に開いた円成寺と権力や地域社会との関係を明らかにする。

第六章で考察する六十六部聖については、すでに前著『日本中世の政治権力と仏教』に三編を収めた。本章は

それらの成果を礎として、六十六部聖の勧進や唱導などの活動の実態とそれを支えた社会的背景、加えてこれらに信仰を託した人々の世界にまで、丹念に奥深く分け入ることにより、中世仏教と地方社会とをむすぶ糸を手繰り寄せようとするものである。

第七章でとりあげる「遠江国山名郡木原権現由来記」には、これまで知られていなかった今川義元と今川氏真の判物写二通が収められているほか、遠江国への熊野信仰の伝播、徳川家康との関係が記されるなど、遠江中部地域の中世から近世にいたる時期の状況をうかがわせる注目すべき内容が含まれている。また他方で、神社草創に関する事実が後世の加筆によって改竄されるなど、地域と宗教との関わりを考察するさいの史料批判においても興味ある問題を提起している。

第八章では、遠江国秋葉山と徳川家康との関係、とりわけ戦国大名間の交渉や連絡などにあつた使僧の役割を検討し、あわせて武士社会への秋葉信仰の展開を論ずる。

補論4は徳川家康高札写、補論5は祠堂帳の新出史料を素材として、これまで知られていない地域社会における寺院のネットワークと信仰の広がりを明らかにしたものである。

第三篇は、遠江久野氏の所伝、古代から近世にいたる旅日記や紀行文、東海道の名物、神社祭祀争論を素材として、地域社会における歴史の記憶を掘り起こそうとするものである。

第九章は、遠江久野氏の成立過程を論じ、加えて久野氏をとりまく歴史的環境、とりわけ奥州平泉中尊寺との関わりに注目し、永禄一年（一五六八）から翌年にかけての今川氏と徳川氏による懸川城をめぐる約半年におよぶ激しい攻防のさい、前線基地として重要な役割をはたした久野城についても検討する。

第十章は、天皇の居住する奈良や京都という、政治や経済・文化において求心力をもった都以外の、鄙とか田舎とか意識された場を旅した人々の著した「道の記」を検討し、古代から近世にいたる作者の人生観や美意識・

自然観、さらに時代の空気の影響と変遷についても考察する。

第十一章は、戦国時代以降、東海道を往来する旅人の数が増すにつれて、各地の宿や街道筋の茶屋で旅人に供され名物として知られるようになったもののうち、瀬戸の染飯の起源と展開を明らかにしつつ、土地の名物を戦国時代以降の旅の文化史に位置づけようとするものである。

第十二章では、多くの年中儀礼を通じて、村人たちの生産過程全般や、現世における精神生活と村の平和維持の役割をはたした鎮守の祭祀をめぐって展開された、幕末における別当寺と神職との争いの実態を明らかにし、室町幕府將軍足利義晴の偽文書が作成されるにいたった背景を検討する。

余篇は、昭和五四年（一九七九）に実施された静岡県森町の藤江家所蔵小杉文庫の調査以来、関心をもち続けてきた阿波出身の国学者小杉榎邨について、父や師、同学の士らとの交友を通じて深められていった学問の方法の形成過程や特徴を検討し、榎邨の人生と学問を幕末・維新の激動のなかに位置づけようとする作業である。

以上の各章によって構成される本書の成り立ちは、次の通りである。

第一篇 地域社会と経典

第一章 平安時代の写経と法会——五部大乘経をめぐって——

河添房江ほか編『叢書 想像する平安文学』八、勉強出版、二〇〇一年

第二章 鎌倉期駿河府中の宗教世界——駿河国有度郡八幡神社旧蔵五部大乘経をめぐって——（原題「静岡市八幡神社旧蔵五部大乘経の成立と伝来」）

『アジア研究』二、静岡大学人文学部「アジア研究プロジェクト」二〇〇六年

補論1 駿河国有度郡八幡神社旧蔵大般若経

新稿

第三章 遠江国洞泉寺所蔵五部大乘経の成立と伝来（原題「天竜市洞泉寺所蔵五部大乘経について」）

『静岡県史研究』一四、一九九七年

第四章 美濃国薬王寺所蔵大般若経の開板と伝来（原題「薬王寺大般若経の開板と伝来」）

『薬王寺——仏像 建築 大般若経——』可児市史調査報告書第一集、二〇〇六年

補論2 伊豆国国柱命神社所蔵大般若経（原題「松崎町国柱命神社所蔵大般若経」）

『静岡県史研究』二、一九八六年

補論3 駿河国清見寺所蔵大般若経（原題「大般若波羅蜜多経」）

『清見寺総合資料調査報告書——清見寺史料調査報告——』静岡県教育委員会、一九九七年

第二篇 地域社会と寺社

第五章 覚海円成と伊豆国円成寺——鎌倉禅と女性をめぐる—— 『静岡県史研究』一二、一九九六年

第六章 中世仏教と地方社会——六十六部聖を手がかりとして—— 『七隈史学』三、二〇〇二年

第七章 遠江国山名郡木原権現由来記の歴史的環境（原題「遠州山名郡木原権現由来記について」）

『人文論集』二九、静岡大学人文学部、一九七八年

第八章 中世後期の秋葉山と徳川家康（原題「中世の秋葉山」）

『静岡県歴史の道調査報告書——秋葉道——』静岡県教育委員会、一九八三年、改訂版一九九六年

補論4 駿河国東泉院と建穂寺——一通の高札写から——（原題「東泉院と建穂寺——一通の高札写から

——」）

補論5 喜捨する人びと——駿河国心岳寺祠堂帳——（原題「心岳寺祠堂帳について」）
『六所家総合調査だより』七、二〇一〇年

『藤枝市史研究』一一、二〇一〇年

第三篇 地域社会の記憶

第九章 遠江久野氏の成立とその歴史的環境 『久野城』IV（袋井市教育委員会）、一九九三年

第十章 旅日記・紀行文と地方社会 『人文論集』六三—二、静岡大学人文社会科学部、二〇一三年

第十一章 名物瀬戸の染飯をめぐる文化史 『藤枝市史研究』九、二〇〇八年

第十二章 近世後期神社祭祀をめぐる争論と偽文書——遠江国榛原郡吉永村の場合—— 新稿

余 篇

小杉楳邨の幕末・維新——近代化のなかの国学——（原題「明治維新と小杉楳邨——近代化の中の国学——」）

『史窓』三五、二〇〇五年

補説 東京大学文学部附属古典講習科 『日本歴史』六一三、一九九九年

旧稿の本書収録にあたり、全体にわたって体裁や表記の統一を図ったほか、修正・加筆を施した。

目次

まえがき

第一篇 地域社会と經典

第一章 平安時代の写經と法会——五部大乘經をめぐって——…………… 3

はじめに…………… 3

一 五部大乘經成立の歴史的前提…………… 3

二 五部大乘經と法勝寺大乘会…………… 8

三 五部大乘經と貴族社会…………… 13

おわりに…………… 18

第二章 鎌倉期駿河府中の宗教世界…………… 23

——駿河国有度郡八幡神社旧藏五部大乘經をめぐって——

はじめに…………… 23

一	八幡神社旧蔵五部大乘経の復元	24
二	八幡神社旧蔵五部大乘経成立の概要	35
三	八幡神社旧蔵五部大乘経成立の背景	37
	おわりに	44
	補論1 駿河国有度郡八幡神社旧蔵大般若経	46
	第三章 遠江国洞泉寺所蔵五部大乘経の成立と伝来	52
	はじめに	52
	一 形状	52
	二 成立	55
	三 伝来	58
	おわりに	61
	第四章 美濃国薬王寺所蔵大般若経の開板と伝来	77
	はじめに	77
	一 形状と構成	78
	二 開板の経緯と願主たち	85
	三 伝来と活用	98

おわりに	103
補論2 伊豆国国柱命神社所蔵大般若経	110
補論3 駿河国清見寺所蔵大般若経	117
第二篇 地域社会と寺社	
第五章 覚海円成と伊豆国円成寺——鎌倉禅と女性をめぐる——	123
はじめに	123
一 覚海円成の周辺	124
二 覚海円成という女性	131
三 円成寺の開創と展開	137
おわりに——その後の円成寺——	148
第六章 中世仏教と地方社会——六十六部聖を手がかりとして——	157
はじめに	157
一 源頼朝の前世	158
二 六十六部聖と「六十六」という数字	164

三	六十六部聖の世紀……………	168
	おわりに……………	174
第七章	遠江国山名郡木原権現由来記の歴史的環境……………	179
	はじめに……………	179
一	「由来記」と木原家所蔵文書……………	179
二	木原権現と神官木原氏……………	180
三	熊野三山と遠江国……………	184
四	「由来記」の内容……………	185
	おわりに……………	187
第八章	中世後期の秋葉山と徳川家康……………	191
	はじめに……………	191
一	秋葉寺別当光播と徳川家康……………	191
二	武士の秋葉信仰……………	196
三	秋葉寺と可睡斎……………	198
	おわりに……………	199
補論4	駿河国東泉院と建穂寺——一通の高札写から——……………	201

補論5 喜捨する人びと——駿河国心岳寺祠堂帳——……………206

第三篇 地域社会の記憶

第九章 遠江久野氏の成立とその歴史的環境……………213

はじめに……………213

一 遠江久野氏の初見史料……………213

二 久努から久野へ……………216

三 久野氏初代宗仲……………219

四 久野氏と原氏……………230

おわりに……………233

第十章 旅日記・紀行文と地方社会……………236

はじめに……………236

一 鄙の長路……………237

二 京へ田舎へ……………242

三 東往西遊……………248

おわりに……………251

第十一章 名物瀬戸の染飯をめぐる文化史	255
はじめに	255
一 瀬戸の染飯の起源	256
二 近世紀行文にみえる瀬戸の染飯	257
三 狂歌に詠まれた瀬戸の染飯	261
四 描かれた瀬戸の染飯	264
おわりに	267
第十二章 近世後期神社祭祀をめぐる争論と偽文書	270
——遠江国榛原郡吉永村の場合——	
はじめに	270
一 二通の「將軍足利義晴判物」	271
二 新出の今川義元判物	273
三 二通の「將軍足利義晴判物」作成の歴史的背景	280
おわりに	290

余 篇

小杉楳邨の幕末・維新——近代化のなかの国学——……………299

はじめに……………299

一 阿波在住期の学問的環境……………300

二 教部省入省……………315

三 帝国博物館出仕以後……………323

おわりに……………330

補説 東京大学文学部附属古典講習科……………352

あとがき

索引

あとがき

調査で心をいれて史料に向かいあうたび、気分は引き締まり、高まりもする。そうして史料の奥に潜む歴史の断片を掘り起こして明らかになった事実と、これまで知られている事がらや人物との思いがけない結びつきに驚嘆し、それらを丹念に紡ぎながら、新しい世界をきり開くのは、この上ない喜びである。それとともに強く感じることは、長い時の変転のなかで、史料を守ってきた所蔵者に対する敬意と、これからも伝える大切さである。

昭和五二年（一九七七）一〇月、私は静岡大学人文学部に着任し、ほどなく静岡県の袋井市史編纂事業に参加した。本書収録の旧稿のうちもつとも早い第九章はその成果である。続いて、金谷町史・静岡県史・藤枝市史に執筆委員や専門委員・編纂委員として関わったから、三七年にわたる静岡大学在職中のほとんどの期間に及んだことになる。

とりわけ昭和六〇年（一九八五）から一三年をかけて完結した静岡県史編纂は、同学の先達たちに導かれて、知見を拡大する得がたい好機となった。静岡県内はもとより県外にまで調査する機会を与えられ、編集すべき史料の対象が古文書・古記録・典籍・金石文・経巻・聖教類・文学作品と広範囲にわたったことから、研究の領域と関心を広げることにもつながった。なかでも静岡県内に現存する五部大乘経や大般若経を調査する幸運に恵まれ、経典と地域社会との関わりを考える着想を得たことは印象深い。第二章・第三章・第五章・補論1～補論3は、静岡県史での調査にもとづくものである。

その後、平成一〇年（一九九八）に始まり、二一世紀を迎えたのち、一五年を要して終了した藤枝市史では編纂専門委員長をつとめた。第十一章と補論5はその調査から生まれた。

また委員ではないが、岐阜県の可児市史編纂事業の一環として始まった薬王寺調査に、乞われて大般若経を担当した。市史編纂室のご理解によって、調査は関係する岡山県・滋賀県・京都市・静岡県と広い地域に及び、大般若経の成立と背景など詳細に分析する十分な時間と便宜を与えられたことは、今も記憶に鮮やかである。その成果は第四章にまとめられている。

本書に収めた論文の多くは、これらの調査にもとづく所見と分析をまとめたものである。いずれも調査なくしては実らなかつたものであり、所蔵者をはじめ、労苦をともし、御教示を仰いだ関係の方々に、改めて深い謝意を表するとともに、本書をもって学恩に報いたいと思う。調査結果にもとづく考察には力を尽したつもりであるが、その後の研究の進展は著しく、思わざる過誤もあるであろう。収録論文の大半は、報告書など多くの方々の目にふれにくいものであったから、一書にまとめることで、関連分野の研究に何がしかの寄与ができれば幸いと思う。

仏教と政治権力や地域社会とのつながりに関心をもったのは、九州大学大学院在学中のことだった。それから三五年余り、ふり返れば丑年生まれにかこつけた、まことに緩やかで寄り道多き足取りというほかないが、いまは本書をみずからの器量による到達点と自覚し、「牛の歩みも千里」を心にとめ、歴史に対して聡明であることを自戒として、次の目標に向かいたい。

本書の刊行にあたり、株式会社社文閣出版の原宏一氏には格段の御高配にあずかり、また担当の三浦泰保さんには、万端に行き届いた丁寧な編集作業を通じて、本作りにかける熱意と気魄など学ぶことが多かった。深く感謝申し上げる。

最後に、本書が亡き両親と養母、泉下の友宗像修三君への手向けとなり、あわせて近く還暦を迎える妻恭子の記念ともなれば、ささやかな幸せである。

二〇一四年八月

湯之上 隆

索引

あ	
赤松顕則	87, 89~91, 96
秋葉山(遠江)	191, 194, 196, 197, 199
秋元安民	305, 306, 308
浅草文庫	318
朝比奈親徳	279
足利尊氏	136, 138, 139, 142, 143
足利直義	141~144, 146
足利義詮	94, 143
足利義教	246
足利義晴	270, 272, 276, 280, 287, 288, 290, 291
足利義政	147
足利義満	90, 91
『吾妻鏡』	19, 40, 224, 228, 229
安達顕盛	133
安達景盛	128, 132
安達時顕	125, 127, 131, 133
安達盛長	128
安達泰盛	124, 125, 128, 130, 131, 133
安達義景	124, 128, 132
熱海(伊豆)	171
阿部正信	41, 265
阿波国統風土記	308, 314
阿波国文庫	302, 303
い	
飯田武郷	319, 321, 322
池田宿(遠江)	242
池辺真棟	307, 308, 330
『十六夜日記』	238
石山寺	324
『遺塵和歌集』	240
伊豆山	113, 114
出雲大社	160
『伊勢物語』	237, 238, 244
一宮	37, 165, 172

市原栄寿	310, 312
一切経	3~5, 13, 15, 18, 44, 56, 215
一山一寧	126, 127
『一遍聖絵』	241
井上哲次郎	352
井上頼国	311, 316, 318~321
『いほぬし』	240
『今鏡』	13
今川氏真	179, 185, 213, 244
今川氏親	243, 244, 279
今川氏輝	50, 279
今川貞世(了俊)	180, 187, 242, 244
今川泰範	146, 206
今川義忠	243, 244
今川義元	179, 185, 245, 246, 273~280, 287, 288, 290, 291
石清水八幡宮	19, 40, 50
忌部神社(阿波)	314~317
蔭涼軒日録	165
う	
上杉輝虎(謙信)	192, 194
右大将殿縁起	158, 160
歌川広重	267
歌枕	237, 238, 245
内山真龍	229
宇津山(駿河)	237, 238, 245, 255
『宇津山記』	243
有度八幡(駿河)	19, 23~33, 35~37, 40, 41, 44~50
え	
『叡岳要記』	6
『栄花物語』	319
『永昌記』	14
江川酒	245
円覚寺	123, 126, 127, 130, 131, 133~136, 147, 171

『延喜式』 309, 314, 318
 円成寺(伊豆) 124, 141~149
 円宗寺最勝会 8
 円宗寺法華会 8
 円爾 6, 37, 171
 円仁 170, 173
 延暦寺 →比叡山 5, 6, 9, 10, 18, 41

お

『笈の小文』 238
 大井川 255, 259, 270
 大井八幡宮(駿河) 277, 288, 289
 大窪寺(駿河) 39
 大沢清臣 314, 316, 318, 322
 大田南畝 251, 263
 大鳥圭介 313
 大宮浅間社(駿河) 37
 大室景村 132, 145
 大八洲学会 299, 322, 323, 326, 330
 大八洲学校 320
 岡倉天心 323~325
 岡部宿(駿河) 255
 興津宿(駿河) 264
 『おくのほそ道』 238, 249
 織田信長 169, 193, 247, 248, 256
 園城寺 10, 15

か

『廻国雑記』 247
 『海道記』 238, 240
 『海道くんだり』 256
 貝原益軒 248~250
 『臥雲日件録』 12
 『花営三代記』 90
 香川景樹 261, 312
 柿本人麻呂 312
 覚海円成 123, 124, 127, 131~145, 149
 覚山志道 124, 127, 128, 130~135
 覚守 134
 『掛川誌稿』 112, 114, 198, 217, 278, 288, 291
 懸塚(遠江) 247
 笠原荘(遠江) 131

可睡斎(遠江) 198, 199
 春日社 13, 19
 春日版 85
 荷田春満 327
 帷庄神明宮(美濃) 81, 99, 100, 102
 葛飾北斎 266
 加藤弘之 320, 352~354
 『鎌倉大日記』 124
 『鎌倉年代記裏書』 133
 鎌倉幕府 123~125, 128, 135, 136, 138,
 139, 160, 184, 215, 227, 232, 240, 241,
 255
 賀茂真淵 306, 327
 烏丸光広 261~263
 川路聖謨 251
 川田剛 319, 320, 323
 河分大明神(大和) 58, 59, 61
 鑑真 5
 関東祈禱寺 125
 関東御祈禱所 159
 関東御分国 185

き

紀伊統風土記 305, 308
 菊川宿(遠江) 171
 喜田貞吉 317
 北野天満宮 19, 169
 『吉記』 16
 義堂周信 171
 木村正辞 322, 323
 偽文書 270, 271, 278, 280, 291
 『九州の道の記』 239
 教部省 299, 314, 316~319, 325, 326
 木原権現(遠江) 179, 180, 182, 183, 186~188

く

『公卿補任』 138, 139
 九鬼隆一 323, 324
 宮内省御歌所 327, 328
 国柱命神社(伊豆) 110, 112~115
 久能山(駿河) 35, 36
 久能寺(駿河) 6, 23, 37~42, 44, 45, 48,

索引

50, 119, 202, 205, 216, 240
 久野氏
 213~216, 219~230, 232, 233, 280
 熊野権現 180, 184, 218, 232, 240, 241
 熊野信仰 179, 181, 191
 久米幹文 305, 306, 316, 321~323, 327
 栗田寛 299, 314, 316, 318, 319, 322
 黒川春村 306
 黒川真頼 319, 324, 325
 桑原藤泰(黙斎) 41, 264

け

契沖 327
 『源氏物語』 244
 憲信(駿河国物社別当)
 19, 24~33, 37~41, 48, 50
 源信 6, 7
 建長寺 113, 125, 127, 131, 134, 135, 141
 『源平盛衰記』 3

こ

高雲外 304
 考古学会 330
 好古社 320, 323, 330
 『江家次第』 309
 光禅庵(美作) 85, 95, 96
 皇典講究所 320~322, 326, 352
 光播 192, 194
 興福寺 7, 10, 12, 13, 15, 19, 58
 弘文荘 35, 95, 98
 高峯顕日 131, 136, 143, 144
 弘法大師 278
 高野山 19, 240, 277~279, 289, 291
 高野聖 208
 高力種信(猿猴庵) 264
 小河(駿河) 247
 五卷の日 9, 14~16
 『古今和歌集』 237, 244, 262, 328
 国語伝習所 320, 323
 『国史略』 313
 後光厳天皇 94
 『古語拾遺』 321, 353
 『古今著聞集』 13

後三条天皇 14
 『古事記』 313, 314, 319
 『古事記伝』 309
 五時教判 4, 7, 11, 12
 五時講 7, 8, 9, 24, 57
 五時八教の教判 4, 57
 古社寺保存会 325
 古社寺保存法 325
 後白河天皇(法皇) 7, 11, 17, 18
 古事類苑 320, 326
 小杉明真 300~303, 306, 309, 310, 312,
 317, 326, 327
 小杉滋子 311, 313, 317, 329
 小杉榎邨 299, 300~331, 352, 353
 小杉縫子 300, 317
 小杉美二郎 300
 後醍醐天皇 135, 138~140, 171, 276
 小中村清矩 305, 306, 314, 316~322, 353
 後奈良天皇 46
 近衛天皇 16, 17
 小林一茶 263
 後深草院二条 241
 後伏見天皇 218
 五部大乘経 3~5, 7~19, 23~33, 35~
 37, 39~42, 44~46, 52, 54~58, 166,
 216, 241
 後堀河天皇 55
 後冷泉天皇 13, 15

さ

西行 237, 255
 『西行上人集』 262
 西大寺 125
 最澄 5, 170, 171
 斎藤徳元 263
 『撮攘集』 12
 薩埵峠(駿河) 264
 『実隆公記』 244
 小夜の中山(遠江) 237, 245, 255, 291
 『更科日記』 238
 『参詣道中日記』 256
 三条西実隆 244
 『三宝絵詞』 7

『山門堂舎記』 5, 6

し

史学協会 321, 322
四季講 6, 8, 24, 57
『四教義』 4, 6, 12
思溪版 55
重野安禪 319
十返舎一九 260
祠堂帳 206~208
司馬江漢 251
柴秋邨 304, 312
柴野栗山 302, 304
慈悲寺(駿河) 39, 42
四部大乘経 5
清水浜臣 306
『积家官班記』 5
『拾遺往生伝』 6
『拾芥抄』 12
修史館 318~320, 325
修史局 308, 318
秋葉寺(遠江)
191, 192, 194~196, 198, 199
寿桂尼 244, 245
修験道 114
『正覚国師集』 140
正倉院文書 318, 325
『常楽記』 143, 144
『続日本紀』 77
『諸国一見聖物語』 166
諸社禰宜神主法度 289
『初例抄』 5
白河天皇(上皇, 法皇)
4, 5, 8~11, 13~16, 57, 181
白須賀宿(遠江) 246
心岳寺(駿河) 206~208
神宮皇学館 321, 352
『新古今和歌集』 237
真言宗 12, 55, 96, 113, 127, 186, 277,
278, 288, 291
『新猿楽記』 239
新庄道雄 40, 47, 50, 197, 203, 219, 220
『信長公記』 256, 267

新長谷寺(美濃) 12, 19, 55, 56, 58, 61
神道裁許状 289, 290
『神道集』 166
神仏分離
23, 46, 61, 103, 110, 182, 201, 291

す

菅江真澄 250
菅原道真 310
『豆州志稿』 112, 141, 149
鈴木牧之 250
鈴木真年 306
崇徳天皇(上皇) 3, 16~18
『駿河記』 33, 41, 264
駿河国分寺 39, 44
駿河国分尼寺 38, 39, 42, 44
『駿河志料』 23, 29, 41, 50, 198
『駿河国新風土記』
31~33, 40, 47, 50, 197, 203, 219
駿河国惣社 23, 37~41, 44, 45, 50
『駿国雜志』 41, 265

せ

聖覚 11
清見寺(駿河) 117~119
『清拙和尚語録』 132
清拙正澄 132, 133, 135
生白堂行風 261, 263
瀬戸の染飯 255~257, 259~268
善光寺(信濃) 162, 167
『先代旧事本紀』 216

そ

宗祇 243, 244
宗長 243, 244
『宗長手記』 238, 244
曹洞宗 126, 147~149, 192, 197~199,
206, 207, 277, 278
『曾我物語』 220, 224, 229
『続古事談』 7
『尊卑分脈』 91, 93, 131, 223

た

『台記』	16
醍醐寺	127, 143, 204, 205
醍醐天皇	37
大成中学校	320, 323
大般若経	3, 4, 13, 38~42, 44~47, 49~51, 56, 77~80, 83, 84, 86, 87, 95, 96, 98~103, 110~115, 117~120, 196, 197
『太平記』	93, 123
平清盛	17, 158
平頼綱	124, 125, 241
高崎正風	327, 328
建穂寺(駿河)	23, 37~40, 42, 45, 201~205
竹田出雲	261
武田信玄	187, 193, 194, 196, 213
橘南谿	236, 250
谷宗牧	262

ち

近松門左衛門	261
仲恭天皇	312
中尊寺(陸奥)	18, 44, 213~216
中人制	244
『中右記』	9, 10, 13~16
長久館(阿波)	304, 307, 308, 313
澄憲	11, 13
『徴古雜抄』	305, 309, 310, 324, 326
兆山岱朕	206~208
『長秋記』	14, 15
長泊寺(京都)	59~61
『長楽寺永祿日記』	247

つ

『筑紫道記』	243, 249
土御門天皇	312~314
土屋斐子	260
坪井久馬三	352
坪井正五郎	330
坪内重岡	307, 308
鶴岡八幡宮	44, 45, 242
『徒然草』	128, 236

て

帝国古蹟取調会	325
帝国大学	326, 353, 354
帝国博物館	323~326, 329
天台宗	5, 6, 11, 12, 24, 37, 41, 57, 61, 117, 160, 202, 207, 326
天台智顛	3, 4, 18, 57, 158
『転法輪鈔』	11
『殿曆』	5, 10, 13~16
天竜川	239, 244

と

東海道	215, 232, 240, 243~246, 248, 249, 255, 256, 260, 291
『東海道五拾三次』	267, 268
『東海道中膝栗毛』	260
『東海道分間絵図』	265
『東海道名所記』	257, 259, 265, 267
『東海道名所図会』	265, 266, 268
『東海道宿村大概帳』	265
『東関紀行』	238~240, 242, 249
東京美術学校	324
東京大学文学部附属古典講習科	320, 321, 352~354
東京帝国大学	352, 353
東京美術学校	320
東慶寺(鎌倉)	127, 130, 131, 135
『東国紀行』	238, 256, 262, 267
東寺	5, 6, 19
東泉院(駿河)	201, 204, 205
洞泉寺(遠江)	12, 52, 54~56, 60, 61
東禅寺版	54, 55
東大寺	5, 12, 14
東福寺	6, 85, 86, 99, 171
『東宝記』	5
東明慧日	126, 127, 134, 135
『東明和尚語録』	134
十团子	255
『遠淡海地志』	278
『遠江国風土記伝』	198, 229
遠山景晋	249, 260
『言繼卿記』	38, 244

『時信記』	16
徳川家康	168, 179~181, 183, 186~188, 192~194, 196, 199, 203, 204, 213, 221, 233, 248
特選神名牒	317
徳富蘇峰	328
徳永種久	259
『土佐日記』	238, 239
『とはずがたり』	238, 241, 242
鳥羽天皇(上皇)	4, 5, 16, 17
杜甫	258
豊臣秀吉	148, 248, 256
鳥居龍蔵	317
な	
内務省	318, 326
長崎高綱	133, 137
中村高平	23, 50
奈吾屋社(大歳御祖社, 駿河)	38, 40, 48, 50, 202
『那智参詣曼荼羅』	166
難波津会	330
『南海流浪記』	240
南禅寺	276, 277
南浦紹明	126
に	
新居水竹	312, 313
新居正道	307
西尾志摩安福	304, 305, 308, 311, 312
二条天皇	18
日蓮	246, 256
日光山(下野)	118, 160, 172, 173
日坂(遠江)	255, 256, 262
『入唐求法巡礼行記』	170
『日本回国六十六部縁起』	163
『日本書紀』	306, 309, 322
『日本霊異記』	103
仁康	7, 8, 9, 57
仁和寺	11, 12, 19
の	
野口年長	307~310

『宣胤卿記』	60
は	
『梅花無尽蔵』	247
萩原広道	306~308
白山	55, 114, 191, 247
橋本宿(遠江)	242
蜂須賀茂韶	303, 305, 308, 313
初倉荘(遠江)	276, 277
八田知紀	312, 327
早雲高古	307, 308
『春の深山路』	239, 240
『晴富宿禰記』	60
伴蒿蹊	236
伴信友	306
ひ	
比叡山 →延暦寺	6~8, 57, 158, 160, 170, 173
『東山往来』	11
『百練抄』	9
日吉社	19
平田篤胤	306, 321, 327, 353
ふ	
福羽美静	316, 320, 322
普济寺(武蔵)	19, 58
藤江家旧蔵小杉文庫	301, 303, 304, 327
藤枝宿(駿河)	256, 267
『藤河の記』	246
富士山	237, 246, 251
藤田彪(東湖)	309
無準師範	171
藤原苺子	4, 16
藤原寛子	13~15
藤原忠通	17, 18
藤原道長	13, 14
藤原師実	14
藤原師通	15
藤原頼長	16, 17
藤原頼通	6, 13, 14
『扶桑略記』	9
補陀落信仰	37

索引

『仏光国師語録』 134
古川古松軒 250

へ

『平家物語』 3, 158, 242
平治の乱 17
『兵範記』 4, 11, 17, 18

ほ

保元の乱 3, 17, 18
『保元物語』 3, 18
北条(伊豆) 123, 124, 135, 136, 138～
140, 143, 144, 146
『北条九代記』 126, 132, 133
北条貞時 123～128, 130～135, 137, 142,
144, 171, 241
北条高時
123, 131, 133, 135～139, 142, 184, 198
北条時氏 128
北条時宗
124～128, 130, 131, 134, 140, 171
北条時頼 126, 128, 167
北条政子 128
北条泰時 128
北条義時 40, 141, 227
宝泰寺(駿河) 46
法然 218, 219
『保暦間記』 126, 131, 137
北京三会 8, 9, 57
法華経 3, 4, 6, 7, 9～13, 17, 24, 35, 53,
57, 157, 160～162, 164, 165, 167, 168,
170, 172～174, 216, 241
『法華玄義』 3～6, 8
法華八講 14, 15, 240
『法華文句』 4, 6
法勝寺大乘会 4, 5, 8～13, 16, 18, 24, 57
法相宗 198, 199
堀河天皇 16
『本朝高僧伝』 8
『本朝新修往生伝』 15
『本朝統文粹』 4, 15, 16
『本朝文集』 4, 9, 11
『本朝文粹』 7, 15

本立寺(伊豆) 135

ま

前島宿(駿河) 255
『摩訶止観』 4, 6
正岡子規 328, 329
松浦長年 308, 310
松尾芭蕉 238, 249, 250
松下禪尼 128
松平秀雲 259, 260
丸子宿(駿河) 243, 255
丸山作楽 321, 322
『万葉集』
239, 262, 306, 309, 314, 323, 328

み

三島社(伊豆) 241
『道ゆきぶり』 242
源顕房 14, 15
源実朝 226, 227
源俊房 14, 15
源師房 14, 15
源頼家 227
源頼朝 19, 44, 58, 128, 143, 158, 160,
161, 214, 215, 279
三宅米吉 324
『みやこちのわかれ』 242
『都のつと』 238, 249
妙心寺 46, 102, 117, 119
三輪社(大和) 19

む

無学祖元 125, 130, 131, 136, 171
夢窓疎石
131, 135, 136, 140, 142～144, 171
宗像社(筑前) 44, 58
村山修験 201, 205

め

『明德記』 91

も

蒙古襲来 125, 184

『最上の河路』	239
本居内遠	305, 307
本居大平	305~307
本居豊穎	301, 305, 322, 323, 329, 352
本居宣長	305, 307, 309, 327
森有礼	353, 354
守住貫魚	304, 314, 317
『師郷記』	60
文武天皇	77, 180~182
『門葉記』	6
や	
薬王寺(美濃)	77~79, 81, 82, 84, 85, 87, 95, 99, 100, 103
屋代弘賢	302, 303
山科言継	38, 202, 244, 245, 247
ゆ	
由比宿(駿河)	264
由緒書	270
『幽囚日詠』	300, 302, 308, 313
よ	
吉田家(吉田殿)	283, 285, 289, 290
吉永八幡宮(駿河)	277, 279~286, 288~291
依田学海	319
ら	
頼朝房	158~160, 162, 163

蘭溪道隆	125
『濫觴抄』	5, 9
り	
律宗	241
李白	258
笠亭仙果	268
良源	6, 8, 57, 158, 167
『梁塵秘抄』	7
『令義解』	309, 313, 314
臨濟寺(駿河)	50, 117
臨濟宗	61, 102, 113, 117, 126, 141, 147, 148
臨時全国宝物取調局	324, 325
れ	
連歌師	242, 243, 249
ろ	
『六十六部縁起』	158~160, 163
六十六部聖	157, 158, 160~166, 168~174, 247, 251
六所大明神(遠江)	60, 61
わ	
『和漢朗詠集』	242
和田義盛	226~230, 279, 280
『和名抄』	217, 219

◎著者略歴◎

湯之上 隆 (ゆのうえ たかし)

- 1949年 鹿児島市に生まれる
1968年 鹿児島県立甲南高校卒業
1972年 静岡大学人文学部人文学科卒業
1977年 九州大学大学院文学研究科史学専攻博士
課程中途退学
1977年 静岡大学人文学部助手
1995年 博士 (文学、九州大学)
現在 静岡大学人文社会科学部教授

主要著書

『三つの東海道』(静岡新聞社、2000年)、『日本中世の政治権力と仏教』(思文閣出版、2001年)、『静岡県史』通史編 2 中世 (共著、静岡県、1997年)、『くすりの小箱——薬と医療の文化史——』(共編、南山堂、2011年)

静岡大学人文社会科学部研究叢書 No.46

にほんちゆうせい ちいししゃかい ぶつきよう
日本 中世の地域社会と仏教

2014(平成26)年10月10日発行

定価：本体8,000円(税別)

著者 湯之上隆

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
製本

©T. Yunoue

ISBN978-4-7842-1773-1 C3021